『今昔物語集』震旦部研究略史（その一）

宮田　尚

一

『今昔物語集』の研究は、難読語の読みの追求と、出典の探索とからはじまった。

『今昔物語集』は他書とのあいだに、多数の類話を有している。和漢の文献に少し親しんだ者ならすぐに気付く、これは『今昔物語集』のきわだった特色だ。ここから『今昔物語集』は、先行文献に依拠して構築された作品ではなかったかとの推測も、容易につく。『今昔物語集』を手にした研究者たちが、まず出典の探索に取りかかったのは自然であったし、それはまた、理にかなった基礎的な方法でもあった。

研究史の黎明期の状況を今日に伝えているのは、岡本保孝の『今昔物語出典攷』（安政七、一八六〇）だ。

序文によれば『出典攷』は、狩谷掖斎の書入れ本を借りて写しておいた岡本保孝が、後に、友人である伴直方と木村正辞の二人も、同じような探索をすすめていることを知るにおよんで、彼らの業績をまとめたものであった。

伴直方は狩谷掖斎が探索をしていることを知らず、木村正辞もまた、狩谷掖斎や伴直方が探索をすすめていることを知らないままに、つまり、三者は三様に、それぞれの得意とする領域で独自の探索をすすめていたようだ。しかも、偶然というべきか、必然というべきか、三人が書入れ用に使用していたテキストは、同一原本に発するものであったという。したがって、岡本保孝のこの判断が正しいとすれば、出典探索に先鞭をつけたのは、テキストを作成した人物だということになる。狩谷掖斎以前に位置するその人物が、誰なのかはわからない。

狩谷掖斎は天保六年（一八三五）に六一才で没している。岡本保孝が彼の書入れ本を写したのは天保初年ごろのことらしいから、氏名不詳の某がテキストを作成して出典探索に着手したのは、文政年間ごろ（一八一八～二九）ということになろうか。

『出典攷』はいまいうように、先人の業績を集約したものだ。それらを批判的にとらえなおすことを目的とした、岡本保孝の個人的な著作ではない。したがって、彼自身の調査は盛り込まれていないし、彼にとってはかならずしも同意できない文献も、〈出典〉とし

てかかげられている。

『出典攷』に岡本保孝の調査が入っていないことは、つぎの発言からたしかめられよう。すなわち、「天竺と震旦とはこころをつくして尋たらんには知られざるはすくなかるへし」と、先人の業績になお検討の余地のあることを指摘したうえで、「此三書にもたれたるをいつるまにまに書くはへおかむとそおもふ」と、追加補充の意志を表明して、彼は序文を結んでいる。岡本保孝自身にとって出典探索は、将来にかかわることなのだ。すでに実施しており、それをさらに今後も継続するというのではない。

また、不同意の文献がかかげられていることも、『三宝感応要略録』に対するつぎの注記、「孝云此書は隆国と同時なれは此書より取りたるにはあらて三宝録に本つくものよりとりたらんおのれ法華攷証に詳に云おきたり」によってあきらかである。法華攷証のための調査実績にもとづいて、『三宝感応要略録』を『今昔物語集』の出典だと認定することに否定的な見解をもってはいるものの、先人の業績をあえて否定することなく、ここでは〈出典〉としてかかげる、という立場を岡本保孝はとっているのだ。

岡本保孝が『三宝感応要略録』を〈出典〉とすることに不同意なのは、『今昔物語集』の作者を源隆国だとする立場にたち、それと『三宝感応要略録』との、成立年代の前後関係に疑義を抱いたからであった。『今昔物語集』を源隆国の作だとすることの当否は別として、彼のこの立場からすれば、『出典攷』に〈出典〉としてかかげられている七十余種の文献のうち、『宝物集』『古事談』『発心集』『撰集抄』『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』『元亨釈集』『三国伝記』などの、いわゆる中世説話集を中心とする作品群についても、不同意であったにちがいない。

『出典攷』に至るまでの出典探索の段階では、どうやら〈出典〉と〈類話〉とを分別する発想はなかった。近似した類話が発見されたとき、話柄の近縁性に幻惑されて、踏み込んだ考察を欠いたまま、それを〈出典〉だと認定してしまったようだ。天竺部や震旦部において、同一話に複数の文献が〈出典〉としてあげられている例が少なくないのも、こうした事情に由来するものであろう。

いうまでもないことだが、出典関係の有無の認定に際しては、話柄の近縁性はもっとも主要な要件となる。だが、むろんそれだけでは不十分だ。出典関係が認められるためには、話柄の近縁性を支える諸条件がそなわっていなければならない。諸条件は、当該作品の性格や、それらをめぐる環境によって異なってくる。成立年代の前後関係のほかには、普遍的な条件はない。したがって出典関係を論ずるについては、対象とする作品の性格や環境等を見きわめたうえで、隠されている有効な諸条件の発見につとめることが要請される。

あえてこのようなことをいうのは、話柄の近縁性にひかれて〈類話〉を〈出典〉と見まがう、『出典攷』に求められるのと同じゃやまりが、その後も繰り返されてきたからだ。『出典攷』は、よくもわるくも、『今昔物語集』研究の原点に位置している。

さて、『出典攷』に示された出典探索のうちで最大の収穫は、『三宝感応要略録』の発見であった。『三宝感応要略録』は、『出典攷』の提唱したおおくの〈出典〉が、研究がすすむにつれてしだ

いに淘太されていくなかでも一貫して支持され続け、今日では『今昔物語集』の成立に決定的な影響をおよぼした資料だと考えられている。

『三宝感応要略録』を掘り起こしたのは、おそらく狩谷掖斎あたりであったろう。岡本保孝は源隆国にこだわったために、『三宝感応要略録』を出典とみなすことには不同意だったが、『出典攷』ではこれを排除しなかった。異なった価値観を併存させた『出典攷』のあり方が、結果として重大な発見を救ったわけだ。つまり、皮肉なことに岡本保孝の名は、彼が〈岡本保孝〉を主張しなかったがゆえに、研究史に名をとどめることになったということになる。

震旦部に関していえば、『三宝感応要略録』とならぶ主要な出典である『冥報記』も、それから『孝子伝』も『後頼髄脳』も、すでにこの時点でさぐりあてられている。ただし、『冥報記』は、『太平広記』と『法苑珠林』との注記を介してみちびき出されたもののようだ。なお見落としもあるし、なによりも本文にあたっていない不徹底さがある。『孝子伝』も、直接なにもとづいたのかは不明だが、『冥報記』同様、なんらかの文献の注記を介して導き出されたものであるらしい。出典としての認知の重みには、『三宝感応要略録』とこれらとでは、比較にならない差異がある。

二

黎明期の研究にありがちな『出典攷』の、混乱や不徹底さをおおはばに払拭し、飛躍的に発展させたのは、芳賀矢一の『攷証今昔物語集』（一九一三～二一）であった。

『攷証今昔』は、古本系の田中頼庸本を底本に用い、丹鶴叢書本等で校合して本文を策定するとともに、広く類話を探索して出典を比定し、『今昔物語集』の当該話の後に、出典や類話の本文をもあわせかかげるという画期的な労作であった。

『国文学史十講』（一八九九・十二）においては『今昔物語集』に一頁しかさかず、しかも「今昔物語は色々な話をまぜごぜに集めたのである」とか、「この書によって其時代の人の迷信、風俗などが分かります」といった程度の認識と関心しか示さなかった芳賀矢一が、一転して出典研究に情熱を傾けたのは、その間にドイツに留学をして文献学への目を開かれた、という事情によるようだ。「国文で記した最旧最大の説話集として、優に世界文学の珍宝と見做すべきもの」と認識をあらたにした芳賀矢一は、漢文説話の日本語化や説話の配列のもんだいに着目するなど、一個の文学作品としての『今昔物語集』の特性を解きほぐそうとの姿勢を、『攷証今昔』では明確にうち出している。彼にとって出典考証は、そのための一階梯なのであった。

採集した類話を、〈出典〉〈類話〉〈同一説話〉の三種に分別するなかで、『法苑珠林』を〈出典〉として前面におし出したのも、『攷証今昔』の見逃すことのできない特色のひとつだ。成立年代の前後関係から判断して、「今昔物語の著作が必ず目に触れたものに相違ない」というのがその理由であった。

『法苑珠林』はすでに、『出典攷』でもとりあげられている。けれども、『攷証今昔』が『法苑珠林』を重視する姿勢は、『出典攷』の比ではない。たとえば『出典攷』は、『法苑珠林』を〈出典〉と

するものを、天竺、震旦両部あわせて五一話だとしているのに対して、『攷証今昔』は一一〇話だとしている。倍増である。天竺部が三九話から五九話に増えているのもさることながら、震旦部にいたっては、『出典攷』で一二話であったものが、『攷証今昔』では一挙に五一話と、おおはばに増やされているのである。

ところが、『攷証今昔』を特色づける『法苑珠林』の重視は、正鵠を射たものとはいいがたい。ちなみに、日本古典文学大系本『今昔物語集』は、『攷証今昔』が五一話だとしている震旦部の〈出典〉を、七話にまでしぼりこんでいる。『出典攷』よりも少ないのだ。この一事をもってしても、『攷証今昔』の『法苑珠林』重視の姿勢が、勇み足の気味の、いささか当を失したものであったことがうかがわれよう。ありていにいうと、別稿でふれたように、『大系本』の主張する七話でさえ、わたしは疑問におもっている。

『攷証今昔』の『法苑珠林』重視は、『今昔物語集』には出典があったとの前提のもとに、採集しえた類話のうちで、もっとも類似度の高いものを〈出典〉だと認定したことに由来するようだ。話柄のうえからは、とうてい出典関係をうんぬんするにあたらないものにまで、〈出典〉の座をあたえている。つまり、『攷証今昔』はその一部に、なおも『出典攷』をひきづっているのだ。

しかし『攷証今昔』は、こうした問題をかかえこんではいるものの、出典考証のひとつの到達点を示すものであり、信頼度の高い本文と、〈出典〉〈類話〉等の併掲という斬新で便利な形態とがあいまって、『大系本』が出るまで、『今昔物語集』研究に不可欠のテキストとしての位置をたもってきた。

なお、『攷証今昔』、あるいは芳賀矢一の『今昔物語集』研究史にはたした役割は、テキストや資料としての有用性のみにとどまらない。芳賀矢一の指導のもとに『攷証今昔』の完成にたずさわった者のなかから、後に『今昔物語集』の最初の総合的な研究書である『今昔物語集の新研究』（一九二三・三）を出した坂井衡平や、本文校訂と出典考証とに格段の精度を加えた『大系本』の校注者である山田孝雄らが出ている。研究者の育成という面からも、『攷証今昔』あるいは芳賀矢一は、おおきな足跡を残しているのである。

三

雑誌『郷土研究』で赤峯太郎、堀謙徳らが出典考証に着手したのは、『攷証今昔』の天竺、震旦部が公刊される直前だった。

赤峯太郎〈今昔物語の研究、一九一三・三〉はまえがきで、「『今昔物語』は日本に於ける最大最古の物語集として、日本の物語文学に最重要な位置を占めているばかりでなく、世界に於ける物語文学界に於ても亦最重用なるものの一つである」がゆえに、出典の調査に取り組むのは「吾々の責任である」と、『今昔物語集』への認識と、出典研究への姿勢を表明した。〈物語集〉と規定するのと〈説話集〉と規定するのとの違いはあるけれど、『今昔物語集』に対する認識は、『攷証今昔』のそれと符合している。文章までも似通っている。

ところが、赤峯太郎らの出典研究は、調査対象の選定が恣意的で、組織的でもなければ、網羅的でもなかった。『攷証今昔』が出てみると、とりわけその感は強い。したがって、せっかくの意気込

みも、『攷証今昔』の刊行によって、にわかにしぼんでしまったようだ。加えて南方熊楠が、同じ『郷土研究』で赤峯論を批判（『郷土研究』一至三号を読む、一九一三・九）したことでもあり、けっきょく連載は三回で打ち切られた。逆にいえば、『攷証今昔』は、それだけ衝撃的な労作であったわけだ。

『攷証今昔』の出現によって、赤峯太郎らは撤退を余儀なくされたのに対して、南方熊楠は逆にもえあがった。『攷証今昔』を検証し、「芳賀博士の纂訂本に出て居らぬ」「同話異文を芳賀博士は引て居るが、此話の根本を挙て居らぬ」「今度出版の芳賀博士の攷証本に出所も類話も出て居らぬ」等、その不備を指摘しつつ、主として仏典から類話をあげている（今昔物語の研究　一～四、郷土研究、一九一三・八～一四・五）。南方熊楠の報告したもののうちで、現在もなお有効性をたもちえているものはごく一部にすぎないが、この口吻には博覧強記の野人らしい彼の、面目躍如たるものがある。

『出典攷』以来、出典のひとつだとされている『三宝感応要略録』を追認し、編者非濁が隆国没後十三年に「随願往生集」を出していることをあげて、『今昔物語集』の編者に隆国を擬する旧来の説を否定したのは小野玄妙（仏教文学研究の基調――その一事例として特に今昔物語集が源隆国の選述に非らざるべしとの考を述ぶ、現代仏教、一九五一・二～三）だった。小野玄妙の論拠は、後に、塚本善隆の説（日本に遺存せる遼文学と其の影響、東方学報　一九三三・十二）を援用した片寄正義（今昔物語成立年次覚書、文学、一九三九・九）に批判されることになるけれども、『攷証今昔』にいたるまで、さしたる根拠もないままに支持されてきた隆国編者説に、出典とのからみで疑義が呈せられたことは留意されてよいだろう。

なお、片寄正義が右の論文によって批判したのは、『三宝感応要略録』と『今昔物語集』との前後関係なのであって、小野玄妙が結論としたところの非隆国編者説ではない。片寄正義も、『今昔物語集』の編者に隆国を擬することには反対。彼は『弘賛法華伝』とのからみで非隆国選者説を主張している（弘賛法華伝と今昔物語集、文学、一九四二・一）。

岩淵悦太郎は、『冥報記』が『三宝感応要略録』とならぶ震旦部の主要な出典であることを指摘した（今昔物語集と冥報記、国文学誌要、一九三五・七）。

『冥報記』もまた、『出典攷』や『攷証今昔』ですでにとりあげられてはいる。しかしそれらはいずれも、『太平広記』あるいは『法苑珠林』等の注記にもとづいたものであった。『冥報記』本文との比較検討をとおしてみちびき出されたものではない。『攷証今昔』は九37「震旦周善通、依破戒現失財得遂貧賤語」に関して、「冥報記ニ出ズトイフ。サレド高山寺本ニ載セズ」と注しており、高山寺本『冥報記』にあたって当該話の有無をたしかめたことはここから知られるものの、『攷証今昔』と高山寺本『冥報記』との接触も、それ以上に出るものではなかった。

岩淵悦太郎は、こうした『攷証今昔』のありかたを批判し、高山寺本『冥報記』と『今昔物語集』との本文を詳細に比較検討した。その結果、『攷証今昔』が出典に擬した四三話のうちから不当なもの一話をはずす一方で、あらたに三話を加え、つごう四五話につい

て出典関係にありと認定した。そのうえで彼は、「高山寺本より少し説話の数の多い」、しかも完本ではない『冥報記』が介在していると推断した。

岩淵悦太郎のこの論によって、『攷証今昔』への信頼度が根底からくつがえされる、というわけではもちろんない。しかし、成立年代への考察や概論等が、『攷証今昔』をほとんど無批判に受け入れて展開される状況のなかで提起されたこの論によって、『攷証今昔』が構造的にかかえこんでいる欠陥が、あかるみに出されたことはたしかであり、権威にかげりが生じたことは否定できない。

どのようにすぐれた業績にも、克服すべき欠陥はつきものだ。したがって逆説的にいえば、その欠陥を指摘することこそ、先人の業績を真に生かすための第一歩になるはずだ。

じっさい、『攷証今昔』以後の出典研究は、『攷証今昔』の切り開いた道をすすみながら、その一方では、『攷証今昔』をつき崩すというかたちですすめられてきた。

岩淵悦太郎の論は、こうした流れに先鞭をつけたわけだが、彼の論もまた、やがて批判にさらされることになる。

岩淵論を批判したのは片寄正義（『冥報記』について、国語国文、一九四一・六）だった。片寄正義は高山寺本よりも所載話のおおい前田家本『冥報記』をとりあげ、『今昔物語集』は前田家本系統の一本に依拠したものだと指摘。あらたに発見されたもののうちから三話を加え、四八話について出典関係にあり、と主張した。

川口久雄が「支那仏教説話集と我が説話文学との関係覚書㈠」（書誌学　一九四一・七）を発表したのは、片寄論の翌月だった。『冥報記』『法苑珠林』を中心に、中国と日本との説話文学を比較しようとの試みだったが、『冥報記』諸本の並列的な解説をした一回めだけで中止された。理由はさだかではないが、前田家本におおきく踏み込んだ片寄論のあおりをうけたことによるもののようにみえる。

小野玄妙の『三宝感応要略録』に関する論と、岩淵悦太郎の『冥報記』に関する論とに、それぞれ有効な批判を加えた片寄正義は、第二次世界大戦に日本が突入する前後に現出した、いわば第一次説話文学研究昂揚期ともいうべき時期の旗手であった。彼があいついで発表した文献学的研究は、目配りが効いていて新見にとみ、およそ半世紀をへだてた現在でもなお、かなりの部分は基礎的な研究としての有効性をたもっている。

片寄正義の所論は一九四三年から四四年にかけて、既発表、未発表のものを『今昔物語集の研究』上下、および『今昔物語集論』の三冊にまとめて出版される手はずになっていた。しかし戦争の激化は、『研究（上）』と、『論』との出版された段階で計画の中断を余儀なくさせた。まぼろしの著となりかけた『研究（下）』が、友人知己の肝入りで、あらためて三点セットとして刊行されたのは一九七四年、片寄正義没後二一年めのことであった。

四

『今昔物語集』に関する最初の総合的な研究書である坂井衡平の『新研究』は、震旦部の研究史という視座からするとき、さしてみるべき点はない。それに対して二冊めの研究書である『研究（上）』

の、震旦部の研究に果した役割はおおきい。

『研究（上）』は、第一編の「基礎的研究」と、第二編の「天竺・震旦部の研究」とからなる。

第一編は、さらに、研究史、題号考、成立年代考、選者論、伝本考、巻序考、発生史的研究、指導精神の八章にわかたれる。このうち震旦部関係で留意すべきは、『弘贊法華伝』との関係をとおして『今昔物語集』の成立年代を比定しようとした第三章だ。これはさきにふれたように小野玄妙への批判と、その裏付けとして用意されたものであり、『弘贊法華伝』が巻七の一部に資料として用いられていることをあげて、『今昔物語集』の成立は、これの伝来した保安元年をあまり下らない時期だと推断した。

この提説は橘健二の支持（今昔物語集成立時「保安元年以後説」についての一傍証、国語国文、一九六一・五）を得る一方、平林盛得（「弘贊法華伝」保安元年初伝説存疑、書陵部紀要、一九七七・十一。『聖と説話の史的研究』に収録）や、宮田尚（今昔物語集出典研究の点検㈢、日本文学研究〔梅光女学院大〕、一九六八・十一、第二章参照）らの批判を呼んだ。

しかし、片寄正義の保安元年以後成立説は、現在もなお、『今昔物語集』の成立時期に関する有力な説のひとつとして、解説等で紹介されている。

第二編は、「今昔物語集以前本朝説話文学に影響せる唐土の仏教説話集」と、「今昔物語集と関係ある諸経典及び唐土の仏教説話集」の二章からなる。「影響せる」「関係ある」は、かならずしも直接的な影響関係をのみ意味しない。『衆経要集金蔵論』『冥報記』『金剛般若経集験記』『顔氏家訓』『諸経要集』『過去現在因果経』『経律異相』『法苑珠林』『法華伝記』『大唐西域記』『金剛経鳩異』『集神州三宝感通録』『三宝感応要略録』『法華霊験伝』など、比較的ゆるやかな関係のものもここではひろくとりあげ、『霊異記』および今昔物語集とのかかわりを中心に検討を試みている。

第二編で留意すべき成果は、これもさきにふれた前田家本『冥報記』と今昔物語集との関係の密なることをあきらかにした点と、一1「釈迦如来、人界宿給語」から一8「釈迦、為五人比丘説法語」までの出典として、『過去現在因果経』をあらたに堀り起こしたことであろう。前田家本『冥報記』は、私見によれば、誤説のおおい粗悪な本であるし、それが『今昔物語集』に直結しているとは考えられないが、現存本中もっとも『今昔物語集』に近いことはたしかであり、こうした前田家本『冥報記』のもつ意味を見出した片寄正義の功績はおおきい。

『研究（上）』は、ひとり震旦部のみならず、『今昔物語集』全般の研究史に屹立する業績だ。『研究（上）』以後の『今昔物語集』研究は、おおむねこれを出発点としているとみてよく、『研究（上）』を抜きにして、『今昔物語集』の研究史を語ることはできない。

だが、『研究（上）』にも、もんだいはある。『法苑珠林』や『経律異相』などのばあいに顕著にみられるのだが、それらと『今昔物語集』との関係の強さを、統計的な面から裏づけようとしているのがそれだ。類話の数はいかにおおくても、それだけではけっして関係の密なることを証明することにはならない。「この中には直

接関係でなく、間接関係にあるものも多い」と片寄正義自身も述べているように、『今昔物語集』と『法苑珠林』とのあいだにみとめられる類話には、類似度の低いものもおおい。そうしたものまでもふくめての統計なら、なおさらのことだ。もんだいは、量ではなくて質であろう。

『法苑珠林』や『経律異相』のようなぼう大な作品にあっては、とりわけそうだ。類似度の高い類話の少なさが、関係の密なることを疑わしめる条件とはなりえても、逆はありえまい。『三宝感応要略録』『冥報記』『弘賛法華伝』などでは、個々のはなしを吟味して質をもんだいにした片寄正義なのに、なぜかここでは量にこだわっている。

『法苑珠林』や『経律異相』を出典だとみなす立場は、『体系本』前後から減少していった。この点に直接言及したのは今野達（今昔物語集の成立に関する諸問題、解釈と鑑賞、一九六三・一）、山口佳紀（今昔物語集の形成と文体、国語と国文学、一九六八・八）、宮田尚（今昔物語集と法苑珠林、国文学研究〔梅光女学院大〕、一九六九・十一。今昔物語集と法苑珠林・再説、日本文学研究〔梅光女学院大〕、一九七六・十一）などわずかであるが、ことさら否定論を立てないまでも、再版に際して前説を訂正したり、出典とみなす作品のリストから除外したりするといった方法で、否定論の立場に立つものが次第に増えていった。

とはいえ、『法苑珠林』を支持する論者がいなくなったわけではない。藤井俊之（今昔物語集編者の素材収集方法（一）、説話、一九七一・五）は、『法苑珠林』を媒体としての、扇形状の収集方法を採用していたと主張。高橋俊夫（今昔物語集天竺部出典の再検討（その二）、国学院大学大学院紀要、一九七三・三）は、天竺部に関してではあるが、一五話にしぼりこんで肯定。また、山内洋一郎（法苑珠林と諸経要集、金沢文庫研究、一九七四・九。諸経要集と今昔物語集、『古典の受容と新生』、明治書院、一九八四・十一）は、『法苑珠林』の前段階に位置していたとみられる『諸経要集』を重視すべきことを主張するとともに、『法苑珠林』への否定論に疑義を呈している。

（未完）